

# CIMの道筋

## 米国に見る光と影

「やれるもの」とは何か。調査団の東出成記先端建設技術センター先端建設技術研究所研究第一・第二部長は、米国のBIM（ビルディング・インフォメーション・モデリング）事例を通し、その導入目的について考察してきた。「目的が明確にできれば、最大の効果を発揮できる」

## 成果は目的の明確化

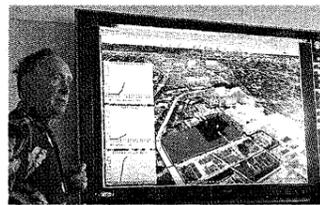


CIMの導入目的について意見を交わす調査団

この期待からだ。国土交通省のCIM（コンストラクション・インフォメーション・モデリング）

は試行段階であるため、3次元モデルデータの利用検証にとどまっている状況が拭えない。誰のために、何のために、BIMを導入すべきか。そもそも部分から考えてみてほしい」と、スタンフォード大学のBIM研究機関CIFIEでエグゼクティブディレクターを務めるジョン・クーンズ氏は呼び掛ける。

CIFIEがBIMの有効性に着目したのは13年前。現在はBIMマネジャーという専門技術者を自主認定しているほか、導入コンサルも行っており、企業経営の視点から幅広く提案している。「われわれのミッションは、BIM導入のビジネスのあり方を研究し、その成果を最大化すること。BIMは手段であり、プロジェクトを成功に導く手法を伝授している」



「BIM+」の意味を説くCIFIEのクーンズ氏

CIFIEの試算によると、建設現場で作業が行われている部分は全体の5%以下に過ぎず、これを工程計画や生産プロセスの調整

## BIMに何を付加するか

例えは洪水から住民を守る場合、取り組むべきは防波堤の整備に加え、災害対策や浸水予測など多岐にわたる。天候で状況が変わる雨量の調整はBIMで解析しにくい。貯水槽に水を入れた状態に置き換えることで対策として表現できる。クーンズ氏は

「BIMに付加させる部分が重要になり、これをわれわれはBIM+（プラス）と呼んでいる。BIMの中に含めるべきもの、除外すべきものを整理した上で、どのような成果を得られるかを読み解き、導入目的を決めることが大切」と訴える。

「BIMに付加させる部分から取り出す。つまり、目標がはっきりしていれば、あとは成果に向かってプロジェクトをマネジメントするだけだ」

国交省では施工段階のCIM試行が始まり、設計からデータが引き継がれる「実践の場」に移行する。発注者、設計者、施工者が一体となり、川上から川下までを見据えた検証プロセスのあり方は、米国では見られない日本独自の試み。小規模工事も対象になり、建設会社は企業規模の大小を問わずCIMと向き合うことになる。「できることから一歩ずつ前に進むことが肝心」と語る東出氏の言葉は、調査団の総意でもある。

### 【建設ICT】

- |          |          |          |
|----------|----------|----------|
| 1. 日経    | 2. 朝日    | 3. 毎日    |
| 4. 読売    | 5. 朝日    | 6. 中日    |
| 7. 産経    | 8. 静岡    | 9. 伊勢    |
| 10. 中部経済 | 11. 建通   | 12. 日刊工業 |
| 13. 建設通信 | 14. 信濃毎日 | 15. 日本海  |
| 16. 建設工業 |          |          |

